

い。どんなことがあろうとも止めなければならぬ。
我々は戦争の真実を子孫へ伝え継がなければならぬ。
い。

我々は戦死された戦友を偲び、心より冥福を祈り、
またご遺族のご多幸を祈念する次第であります。合掌

「一将 功成りて 万骨枯る」

輻重第十二連隊第一中隊戦友会「西湖会」

「一ツ星の詩」を参考資料とする

二年と十一カ月の大東亜戦参加

滋賀県 鉤 吉道

大正七年生れの私は、第一補充兵役、二十四歳で教育召集（三ヵ月）の令状をもらったのは、確かその年（昭和十八年）の五月二十日頃、麦、菜種の取り入れが始まったときであった。農業を家業とするわが家は当時、一町七反余りを耕作しており、新婚二ヵ月の妻を含め祖父と父母、弟妹、長男の私とで十人の大家族

だったのです。

兵庫県青野ヶ原の中部第四十九部隊（戦車第十九連隊）に同年八月一日入隊したのです。教育召集の三ヵ月というのは名目だけで、三ヵ月経過した時点で臨時召集に切り換えられました。

少しだけは戦車操縦の特訓も受けたのですが、同年の十二月中旬ごろには南方要員として夏服を支給された。船便を待ったため、名古屋近郊の瀬戸廠舎に冬の間から春先まで滞在しておったのです。私は原隊出発と同時に中尾少尉の当番兵を命ぜられ、身の廻りの世話などをする任務でしたが、同室の将校の中には酒好きなのが出て、当番兵仲間で酒集めに協力することになり、私も名古屋の親戚まで何回か外出して無理をいっておったものです。

そのうちに、第二軍野戦自動車廠に転属が決まり、下関の旅館に二泊し、門司を出航したのが昭和十九年四月二十九日でした。私たち兵隊は全く行先は知らされておりません。三列縦隊で約十五隻の船団は、両側に駆逐艦や海防艦、空母も一隻は時々見えていました。

五島列島から台湾を過ぎバシー海峡に近づく、夜になつて僚船が火柱を上げていのが一ツ二ツ見えるではありませんか。

さらに翌朝には別の船か艦か解かりませんが、魚雷で半分ちぎられて止まっているのが眼に入ってくる。次はどこにくるのか、また水柱が立っているのです。雷跡が見えてくるのを指さしながらざわめいているうちに、とうとう私の乗船している船（六千トン）に魚雷の直撃をうけたのです。

丁度朝の飯上げの時でした。私は当番兵の仕事の間をみて戦友の阿部一等兵にカユ食を持っていくため、救命胴衣を片手にさげたまま甲板中央部にいたのでした。

船首がドーンと大きな爆音と共に水煙がものすごく上がったと思うと、船首に勤務していた暁部隊の船兵が二、三人そのショックで吹き飛ばされて私達の眼の前へ、胴体や足がチギれてバラバラッと降ってきたのは、びっくりしたものでした。

そして気の早い兵隊達は、積んであるイカダを海に

おろして、飛び込んでいたのでした。みんなで二十人位はいたでしょう。私はとにかく救命胴衣を手に提げているのですから早いとこ装着をして、飛びこんでいく海面をジッと眺めて順番を待っているのです。タバコを吸うあの命令はよく徹底していたので火柱にはならず、幸いにも船は沈まなかつたのでした。

そして二日後にはマニラに上陸したのですが、この魚雷の直撃が私の大東亜戦争参加で一番こわい目に出合った出来事でした。

マニラでは一週間ほどの間、飛行場の整地作業に汗を流して、同年五月二十四日にはハルマヘラ島に転進。ここでは栈橋などは全然なく、全島がジャングルのため船を停泊させておき小さな舟艇で直接浜辺に乗り上げ、上陸したものです。

竹の柱に、竹で床を作り、ヤシの葉で屋根をふくといった即席の兵舎のいくつかが、手早く出来上がり、ここでは物資集積所の揚陸作業が私達部隊の任務でした。揚陸をしていたある日でしたが、航空食の梱包荷くづれが見つかり、みんな珍しいので、むらがついて

たことがありました。次の大作戦のための基地作りだ
と思うと、ジャングル作戦にも楽しいこともあったの
です。それも二ヵ月位でまた転進でした。

今度は八月二十六日、セレベス島のマカッサル港に
上陸したのですが、海岸線一帯は全部が海軍の縄張り
で、後統の陸軍は止むを得ず、ここでもずつと山深い
ジャングルの中です。南緯五度と聞きましたが大まか
じように竹とヤシの兵舎作りから始まったのです。

ここで初めて私は、当番兵を解かれ、經理室勤務(上
等兵)となり、小さなセレベス馬を現地人より借り、
衣と食の確保が第一の生活でした。私は主計下士官の
命によって、兵隊の衣の方はジャワの現地生産のもの
で補給し、米と野菜は全部現地で調達するのです。
米は、南洋興発という民間会社が粳で集積したものを
すぐに白米にしてしまい、内地米と比べ味の方は余り
苦になりませんが、ただ量の方が問題でした。

ようやくここでの生活も落ちついた同年十一月十五
日付で第二方面軍の指揮下となり、兵器勤務隊に配属
の命令があったのですが、任地はそのまま、隊長も

同じ根岸大尉でした。この隊長はカイゼル髭が有名
でした。その頃スマトラからきた兵補(現地人)が二
十一人ほど、しばらくの間兵器勤務隊にも配属され、
規律も案外よく、使役には良く間に合っていたよう
でした。

赤道をこえて、南緯五度といえますと、年中同じ軍
装(半ソデ、半ズボン)のため四季が全くわからず、
日めくりを頼りにするばかりの毎日でした。この島に
は鉄道は一つも敷設されておらず、僅かに幹線道路ら
しきものがあるだけです。赤道に近いといっても小高
い山の中の兵舎です。内地の夏と同様で、スコール
もあり、木の陰は涼しいところもあります。

しかし昭和二十年の元旦は、根岸隊長の心づくし
餅つきができて将兵一同さらに武運長久を祈ったので
す。ときどきの戦況ニュースは大本営発表ばかりでは
なく、いろいろと入ってくるのです。あとで判ったの
ですが戦局は悪い一方であつたようで、このセレベス
島は何時まで平穏なのかなどと、戦友達と話をするこ
とが多くなっていました。我が友軍も、早く体制を立

てなおして、反撃に出てくれるものと期待していたのでしたが…。

そして四月頃からは、パレパレ港あたりの上空をときどき飛行機が旋回しているのが見えるのでした。それを友軍と信じていたのですが、それは後で判ったのですが敵の偵察飛行だったのです。いろいろと憶測ばかりの毎日が続いているうちに、ついに兵站部隊にも敵の上陸作戦に備えて戦闘訓練の実施が発令されたのです。いよいよ戦闘部隊に編入され、毎日毎日が銃を持つての訓練の連続でクタクタでした。そして二ヵ月余りの訓練の成果を部隊長検閲に予定していた期日が、奇しくも終戦の日と同じ八月十五日であったのです。

この日何も知らない下士官、兵は指定のあった場所に整列をしているのですが、将校は誰一人として姿を見せないのです。しかしニュースが入ってきて、将校は全員、天皇陛下の玉音放送を聞いていたのであって検閲は中止するとの命令で、私達はホッとすると共に複雑な気持ちになりました。広島に新型のマッチ箱ぐ

らしいの爆弾が落されたらしいとか。日本はやはり負けたらしいとか、どこからか、ガリ刷りのニュースが再三届くようになり、ウソかホントか判らない毎日が続き、次第に内地の事情も伝わってくるのでした。そしてつぎに命令を待つのみでした。

九月も終り頃であったろうか、武装解除の命令を受けたのでした。その解除された武器弾薬から資材全部、私達の兵器勤務隊へ集結されてきたのには驚きました。

終戦の残務整理は大変でした。実戦をやったことのない私等兵站部隊は、どういうことが本務であるのやら、判らないままなのです。集結されたこの武器などはみんなどこへ持って行くのだろうと注目していると、全部近くのパレパレ港から船に積み込まれ、遠くの海中に投げ込まれたのであった。

そして抑留生活に入ったのです。昭和二十年十月十八日、六キロほど離れたマリンプン地区へ集結を命ぜられ、同月二十六日には集結完了できたのですが、ここでは炊事班勤務を命ぜられました。抑留生活は、何

といつても健康保持が第一なのです。食糧の確保とカロリー下限をどの辺で保持させるかで責任は重く苦勞したものです。

炊事班での仕事は帳簿つけと湯茶当番でした。中でも米の確保でした。小原主計中尉が交渉してきて旧日本軍が貯蔵していたものをもらつてきて、苦勞して空ドラム缶の中につめ、夜間作業で各兵舎の床下に埋めたのです。豪州兵が指示した定量では腹が減つてもたない。二重帳簿で米の受け払いと糧抹庫の出入りは、班長と助手をしていた私の仕事であつた。

このような抑留生活も、ずっと初年兵のままなのです。内地出発が初年兵、以来一人の後統部隊もきてくれない。敗戦間近い外地勤務であつたので止むを得ない状況でした。それでも昭和二十一年三月一日付で兵長に進級ができ、やがてついに内地送還の日がきたのでした。

昭和二十一年六月九日パレパレ港より出航する日はみんな豪州兵の服装検査を受け、制限内の服装だつたのです。タバコも一人二〇〇本だったが私は吸わない

ので准尉の分も持つて乗船したものです。

十九年四月の内地出航のときと違い、復員のときの船足の早いこと、十四日目（六月二十三日）には和歌山県の田辺港に上陸して同日復員完結し、召集解除となつて奈良県を通過し、滋賀県の草津駅に下車することができました。ちょうど田植えが、もう少し残つていたわが家へ落ち着いたのです。

終戦後の食糧事情は農村であつても供出のやかましいときで、苦しいものでした。出征中の労力不足で、預かつていた三反余りの田は返還され、留守を守つていた妻と父母は大変に苦勞したことだろうと、その労苦に深く感謝していたものです。

戦闘の無い戦歴

茨城県 猪瀬良一

「あなたの先の大戦における旧軍人軍属としての御苦勞に対し衷心より慰勞します。」